

夢湧く夢に夢中

第17号

令和7年1月31日 文責：大谷

おしひらいて、せまる

「ありがとうございます」

スクールバスの運転手さんに一礼して降車してくる。

そして、白い息を吐きながら「おはようございます」と

挨拶を交わす。一見何気ない朝の光景であるが、こんな生徒の声が、寒さで凍りついていた学校の空気を一気に溶かしていく。

「さあ、今日も頑張ろう」そう思わせてもらっているのは、きつとわたしだけではあるまい。

わたしは子供の時からずっとサッカーをしてきた。何の輝かしい経歴はないが、小、中、高そして大学と、多くの仲間と恩師に出会い、サッカーを通じて実に多くのことを学ばせていただいた。今、自分がここにいるのはサッカーのおかげとさえ思っている。では、わたしは、サッカーで何を学んだのか。

「挨拶ができないようなチームは勝てんぞ」

二十数年前に勤めていたある学校で、当時のサッカー部の生徒にこう声を掛けた。理由は、強豪と言われるチームほど、どの選手も挨拶が上手かったからだ。「挨拶くらいでさんと、勝てんばい」そう言い聞かせてきた。しかし、当然のことながら「挨拶だけ」していても、到底勝てるわけではなく、むしろ「なんで俺たち(サッカー部)ばかり言われなとや」みたいな嫌悪感が漂ったのだった。

そんなとき、あるチームの選手たちの挨拶が、わたしの目にとまった。その選手たちは、ウォーミングアップをするために着替えを済ませ、スパイクを履こうとベンチに座っていた。すると、そこを通りかかったわたしに気づくや、スパイクの紐を結んでいた手を止め、みんなが立ち上がり「こんにちば」と挨拶をしてくれたのだった。

そして、そのチームは試合でも実に質の高いサッカーを見せていた。なぜなら、選手一人ひとりが、自分で判断し、お互いに声を掛け合いながら常に連動していたからである。わたしはサッカーの技術や戦術だけではなく、自立した選手たちにも圧倒されたのだった。痛烈に思い知らされた。

「挨拶ができるからいいチームではなく、挨拶ができる自立した選手が集まっているから、いいチームなのだ」と。

実は、このチームこそ、その日の対戦相手だった。試合は当然のごとく完敗。対戦相手の監督であるわたしに、手を止め立ち上がって、相手に正対して挨拶ができるチームである。結果はしかるべきだった。負けた悔しさよりも、「挨拶せんと勝てんぞ」としか言えていなかった自分を心底悔やんだことを思い出す。そして、今でも当時の生徒らに申し訳なく思う。

暖房で温められたスクールバスの車内から、冷たい風が吹く外へ出ると、思わずポケットに手を入れて、身を縮めたくなるもの。しかし、わたしのことに気づくと、ポケットに入れかけた手を戻して挨拶してくれる人や、挨拶とともに笑顔を見せてくれる人、こちらにちらりと視線を送りながら照れくさそうに挨拶してくれる人、中には立ち止まって、わたしに正対して挨拶してくれる人もいる。わずか一秒にも満たないこのやりとりが、朝の寒さを忘れさせるどころか、体のどこか中心部分あたりに温かみを感じさせてくれるのだから不思議なものである。

「挨拶(あいさつ)」の「挨(あい)」とは、「おす。ひらく。おしひける」という意味があるそう。そして、「拶(さつ)」には「せまる。おしよせる」という意味がある。つまり、挨拶とは、こちらからまず相手の心を「おしひらいて」、そして相手の心に「せまる」となるようだ。なるほど。寒い冬の朝だろうとも、わたしは生徒みんなの挨拶に心をおしひろげられ、そして心の中心部分にせまられていたのだ。だから、温かかった。有難いことである。

■学校評価アンケートへの御協力ありがとうございました。集計結果は後日改めて公表させていただきます。

■2月は公立前期選抜や私立一般入試をはじめ学年末テスト等に向けて、引き続き学校総体で取り組んでまいります。保護者の皆様の御理解と御協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。